



「老いと医療考（置賜地区の医療に従事して）」

公立置賜総合病院 診療部長(泌尿器科) 久保田 洋子



私は、27年間の医師経験中、置賜病院に来る前の23年間は、主に泌尿器悪性腫瘍の治療に携わってきました。スタッフも多く、単一の疾患のみ持つ若年の患者が多かったため、泌尿器科の狭い範囲でも、排尿障害、結石、癌、不妊症など各分野に専門の者が居り、それぞれ分業で治療を行うことができました。しかし、当院に来て、合併症が多い高齢者(主に寝たきり)の尿路感染症(排尿障害や尿路結石に伴う)患者が入院の半数を占める状況となり、癌と戦うことは老いと戦いに比べると、なんと整然としているかを教えられました。癌は進行度と悪性度により、行うべき治療は世界的に標準化され、効果もパーセント単位で予想でき、必要に応じ治療法選択は明快です。しかし、老いは本質的に医で治せるものではない点、癌のように合理的に事を運ぶことができません。一時的に感染を治しても、本質が老いである以上、またすぐ生命を保てなくなって、たくさんのチューブから一時的な生命を吹き込むため戻って来てしまいます。退院しても、寝たきり状態の生命を繋ぐためには絶大な経済力と労働力を要します。家庭で悲鳴を上げるのと同様、介護施設を運営する社会(自治体や国)でも、働ける者の負担する税、保険料はいくらあっても足りないはずで、疾患と医療は明快な理論でつながりますが、老いに対し、どこまで医療を介入させるのか、多分に経済学的、哲学的、倫理的、情緒的なことのように思われます。

置賜地区は、飯豊町の高齢化率31.1パーセントを筆頭に、日本でも有数の高齢化地域です。現在、東京都の高齢化率は17パーセント台で、平成32年に24パーセントになると予想されています。当地区の苦悩は10年後の日本全体の姿でもあるわけです。若年者も含め、日本全体が現在のようにマネーゲームに興じることなく、死や老い、生命の倫理について、まじめに考え、古い時代の情緒と品格を取り戻さなければならない時ではないかと感じます。





院長 山口 鋁一 副院長 加藤 滉 副院長 豊野 充

内科(消化器科)

診療部長 鶴飼克明
科長 渡辺晋一郎
医長 武田 忠
医長 大村清成
医長 服部悦子
医師 安藤嘉章
医師 熊澤 豊
医師 矢尾板孝夫
医師 富田恭子

内科(呼吸器)

科長 稲毛 稔
医師 武田 宰
医師 荒生 剛
医師 片桐祐司

内科(腎臓・透析)

人工透析室
室長 市川一誠
医師 石川瑞穂
医師 星川仁人

循環器科

科長 角田裕一
医師 山内 聡
医師 奥山英伸
医師 屋代祥典

内科(血液)

部長 佐藤伸二
医長 吉野真人

内科(糖尿病・内分泌)

科長 江口英行
医師 能登貴史

小児科

科長 仁科正裕
医師 木島一己
医師 奥山志野

精神科

科長 赤羽隆樹
医師 鈴木春芳

外科

診療部長 薄場 修
科長 小澤孝一郎
医長 橋本敏夫
医長 東 敬之
医師 木村真五
医師 矢野充泰
医師 間瀬健次

整形外科

診療部長 林 雅弘
科長 豊島定美
医長 佐藤哲也
医長 後藤文昭
医師 佐々木淳也
医師 鈴木 勝
医師 塚本重治
医師 山本尚生

心臓血管外科

科長 後藤智司
医長 小鹿雅隆

皮膚科

医長 紺野隆之
医師 紺野恵理子

脳神経外科

診療部長 金城利彦
医長 黄木正登
医師 齋藤佑規

婦人科

診療部長 沼崎政良
医師 森 敏恵
医師 山谷日鶴
医師 前川絢子

呼吸器外科

医療連携部長
山田昌弘

泌尿器科

診療部長 久保田洋子
医長 大地 宏

眼科

科長 梅津由子
医長 寺島和人
医師 高橋知美

耳鼻咽喉科

科長 櫻井真一
医長 大竹祐輔
医師 鈴木祐輔

麻酔科

科長 山口勝也
医長 鈴木香織

歯科口腔外科

科長 安川和夫
歯科医長 山森 郁
歯科医師 平 幸雄

臨床検査部

部長 布山繁美

放射線科

科長 伊東一志

臨床研修医

深谷 健 中島 拓
横山森良 山岸敦史
沼田 綾 影山咲子
岡崎慎史 舟山 哲
本田晋太郎

救命救急センター

センター長 岩谷昭美
副センター長 佐藤光弥



看護部・医療技術・事務部 一覧



看護部

看護部長 多田美智子
 副看護部長 小松修子、副看護部長 大木京子
 看護専門員 沼澤芳子、看護専門員 高石よし子
 看護師長 安部弘子、看護師長 小熊香代子
 看護師長 梅津真由美、看護師長 遠藤俊子
 看護師長 竹田美千子、看護師長 高橋ひとみ
 看護師長 内山洋子、看護師長 渋谷美奈子
 看護師長 鈴木由美子、看護師長 佐藤佐代子
 看護師長 波田野直子、看護師長 石川みどり
 看護師長 小林律子、看護師長 高石純子

薬剤部 薬局長 豊口義夫

放射線部 技師長 川井久雄

臨床検査部 技師長 鈴木寛治

臨床工学室 技師長 平 正純

リハビリテーション室 副技師長 富岡秀則

栄養科 副技師長 井上信子

事務部 事務局長 菅原好見

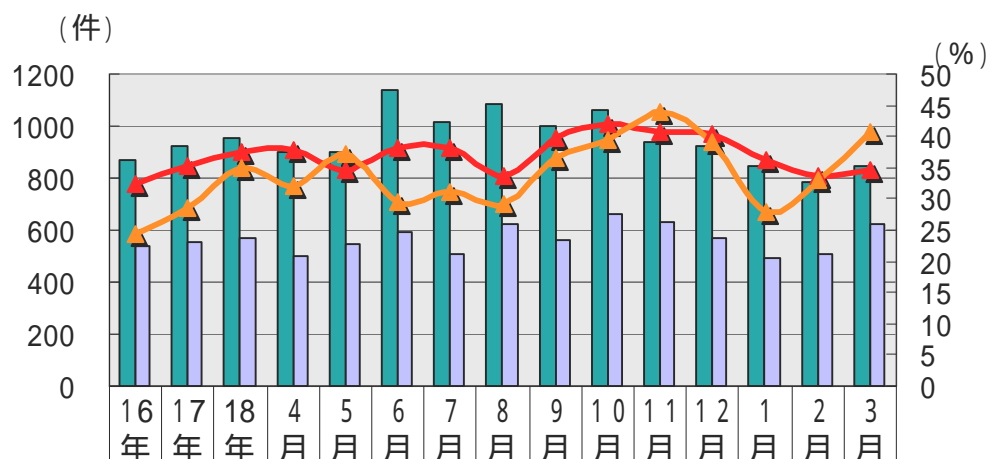
事務局次長 嶋貫栄次、総務課長 大沼豊広

財務課長 齋藤環樹、医事課長 生田敏一

情報システム課長 加藤正二

(平成 19 年 5 月 1 日現在)

平成 18 年度紹介件数、逆紹介件数の推移



■ 紹介数(件)	866	920	953	901	899	1114	1011	1081	998	1061	938	923	850	785	846
■ 逆紹介数(件)	537	551	568	502	543	593	504	626	559	659	634	570	494	510	622
▲ 紹介率(%)	32.	35.	37.	37.	34.	38.	38.	33.	39.	41.	40.	40.	36.	33.	34.
▲ 逆紹介率(%)	24.	28.	35.	32.	37.	29.	31.	29.	36.	39.	44.	39.	28.	32.	40.

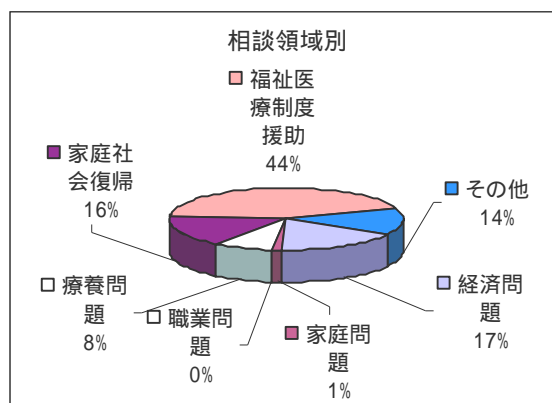
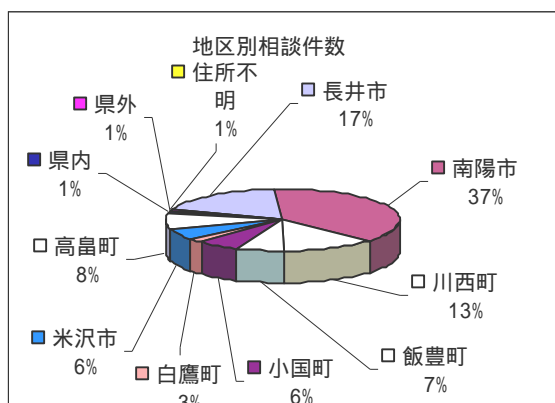


平成 18 年度の紹介件数は前年度と比較して、月平均約 33 件数増加し、紹介率も年平均 37.5 パーセントと順調に推移しております。また、当院から各診療所へ紹介させていただいた件数は、前年度と比較して、約 17 件増加し、紹介率(逆紹介率) 35.0 パーセントと約 7.5 パーセント伸びております、特に 5 月と 11 月においては、紹介いただく件数より、紹介させていただいた件数の方が上回った月も出てきております。当院と各診療所のみなさまとの連携が年々円滑に進んでいる証と存じます。

今後とも、連携を密にし、患者様が適時適切な医療を受けられるよう努めてまいりますので、各医療関係者のご理解とご協力をいただきますようよろしくお願いいたします。



平成18年度の医療福祉相談件数は 1,617 件 前年度比 15.4%増



平成18年度における医療相談件数は1,617件(平成17年度は1,401件)ありました。障害者自立支援法改正等で相談件数が増加したものと思われます。相談区分別では、ご本人とご家族からの相談が45パーセントと約半分近くを占め、医師・看護師からの相談が約27パーセントでした。また、継続相談が70パーセントを占め、時間を要する案件が多いことを示しています。さらに、対応形態としては、面談が69パーセント、電話によるものが29パーセントで、できるだけ直接お話を聴かせていただきながら対応してまいりました。処置内容としては、指導助言が52パーセント、関係調整が39パーセントを占めました。なお、上記グラフから読み取れますが、地区別相談件数については、病院組合構成団体(南陽市、長井市、川西町、飯豊町)が74パーセントを占めます。相談領域別では、福祉医療制度に係る援助が44パーセントでした。



平成19年度 医療連携室スタッフ紹介



平成19年度の人事異動とがん相談支援センターの開設に伴い、新規スタッフも加わり、総勢13人のスタッフによる業務を進めてまいります。昨年に引き続きよろしくお願い申し上げます。



職員紹介

前列右側から、医療連携主幹 生田敏一、医療連携部長 山田昌弘、主幹補佐 小松修子、主幹補佐 高橋清数、福祉相談員 佐原和一、後列右側から、予約センター 安部亜津子、斉藤恵子、大塚里絵、遠藤由美子、高橋京子、医療専門相談員 加藤和子、事務補助 吉田育子、医療連携主査 熊坂正規

